空からの贈り物

kurunau

―やつらに一撃お見舞いしてやろうぜ。
　そう意気込む私の相棒を見て私は呆れ顔でため息を吐いた。私はパイロットだった。相棒は私の後ろに乗って敵を観測する偵察役を担っていた。当時、飛行機という鉄の塊が空に舞い上がるようになったころ、飛行機には一切の攻撃方法が無かった。いつ暴発するか分からない銃を装備することは不可能だったし、爆弾など開発されるのはもうちょっと先のことだったからだ。だから当時の飛行機の役割は敵の偵察をする程度だった。だがそれでさえ有効的ではなく、敵も味方も圧倒的な数で押し寄せ、波状攻撃を行うため、偵察なんぞ、ただの観察日記でしかなかった。そんなとき相棒はその言葉を吐き出していた。
　ある日、観察日記に新しいページを追加された。いつものようにエンジンを掛け、整備員がプロペラの羽を勢い良く回し、新品のスクラップエンジンが鳴り響く、黒い煙が排気口から焦げる臭いと共に吐き出され、私は少しうんざりとした顔でゴーグルとマスクを着ける。後ろに相棒の姿が見えないのに気付き辺りを見渡した。残念だが相棒が居ないとただの遊覧飛行になってしまう。相棒は遅れて大きなバッグを持って後部座席に乗り込んだ。私は不思議になってその大きなバッグの中身はなんなのかを尋ねた。相棒はその言葉を待っていましたといわんばかりに少し笑い、その大きなバッグの中身から一本抜き出した。「いいもんのビールだぜ、お前も一杯どうだ？」とドヤ顔で答える相棒を無視して回転数を上げてゆく、滑走路にゆっくりと進み、さらに回転数を上げる。ピッチを上げ、滑走路から車輪が浮いた。高度を上げ、敵の戦地へと急いだ。黒い煙が上がったのが分かった。だが敵の姿が見えず、上がっている旗は我が軍のものだった。私は次の戦地に行くため、高度上げようと旋回しながら高度を上げていた。下には勝利に喜ぶ戦士たちが居た。高度を上げている最中私の首筋に冷たいものが当たる感じがした。雨での飛行は不可能だが今日の天気は雲ひとつない晴れだったのだが仕方なく私は基地へと方向を変え、帰ることにした。とにかく今日の電報には今日の勝利が流れるに違いない。
＜今日ハ晴天ニツキ北ヘ進軍スルニ当タッテ大規模ナ戦闘アリコレヲ我々ハ敵ヲ粉砕シタリ、ソノ際、空カラビールノ雨ガ降ル、空軍ノ粋ナサプライズニ我々ハ感謝スル＞
　どうやら、あの高度ではビールの気圧には耐えられなかったらしい。
　後日、上官と補給員と他のパイロットに叱咤激励された上、一週間、ビールが支給されず、整備員にもいろいろ言われたが全員、悪意は無かった。別に大した問題でもない上、この相棒が何かやらかすのは昔からの癖のようなものだったからだ。だが私は府

に落ちない点があった。たとえビールが気圧に耐えたとしてそのビールをどうするつもりだったのだろうか？私は相棒にそのことを聞いて見ることにした。「あぁ、ビールを敵に投げて、酔っ払った状態なら戦闘にもならないだろう？」と答えた。たとえ、ビールが気圧に耐えられても、きっとあの高度から落とされる衝撃には耐えられないだろう。

今日もまた、観察日記に新しいページを追加された。エンジンを掛け、排気口から焦げた臭いと黒い煙を吸って、うんざりとしながらも相棒の姿を探す。相棒はせっせと後部座席に何かを積み込んでいた。私はなにをしているのか問うと「レンガだ、これなら敵に直撃できるだろう？」といって、レンガ積み続けた。私は言った「そんなに積んだらお前はどこに乗るんだ？」その言葉に相棒は一瞬作業の手が止まり、後部座席からほとんどのレンガを取り除いた。そもそも後部座席にそんなスペースなんぞ有りはしない、渋々、数個だけ持ち、空に上がった。蒼い空を飛び戦地に飛んだ。いつもの空に機体の陰が見えた。徐所に見えるその機体は敵のマークが印されていた。だが焦ることなく、すれ違った。軽く敬礼し、親指を立て敵の機体に向けて『グットラック』と送った。相棒もほぼ同じことをした。敵のパイロットも同じく敬礼し、『グットラック』と送った。それが空に生きる男のルールみたいなものだった。

ようやく戦地に着くと先に偵察を済ませると同時に相棒のレンガ投下が始まった。敵の真上でどんどんレンガを落としていった。敵は突如レンガが降り、少々パニック状態になっていたがそれが私たちの攻撃だと分かると大笑いしているのが分かった。相棒は気付いていなかったようだが。帰ってくると相棒は自慢げにそのことを話していた。みんなも少し呆れ顔ではあったが暇潰しになるとその話を聞いていた。そんなある日、倉庫に相棒の姿があった。私が近づくと相棒は何かを企んでいるようで、レンガを細かく砕いていた。「これで沢山持ち込めるぜ」私は呆れ顔で言った「笑われるだけだ、やめとけ」と。

その日、観察日記に新しいページが追加された。いつものように焦げた臭いと煙を吸ってうんざりとしながら相棒の姿を探す。相棒は急いで、大きなバックを持って後部座席に乗り込んだ。蒼い空に飛び、高度を上げる。途中でまた敵の飛行機にすれ違う、同じようにグットラックと送るが相棒はバックを気にしており、やや不安定なグットラックを送った。敵のパイロットは少し心配そうな顔をしており、そのまますれ違った。戦地に駆けつけるとそこはまさに戦闘中だった。弾丸が飛び交い、土煙が舞っていた。偵察を終え、旋回する。相棒はバックの中身を取り出し、敵に向かって投げつけた。最初は何かの缶詰かと思っていた。投げている最中、相棒に持っていた缶詰が爆発した。正直は毎回、相棒がやる投下作戦には少しばかり楽しみにしていたが、今回ばかりは許

されないだろう。私もそれに反応し、思わず叫んだ「シュールだ！」。下には白い液体がばら撒かれており、敵はパニック状態だった。なんと相棒は世界一臭いと異名を持つポーランドの魚の漬物、シュールストレミングを投下していたのだ。私はそれから逃れようと思い速度を上げることしかしなかった。フラフラな状態で帰還した私を心配する者しかいなかった。飛行機の運転に評判がある私だったからこそフラフラな飛行に少々心配になったらしい、その上、滑走路の上で突然、吐き出し、担架まで持ってきている者さえいた。原因は相棒が出ると同時に分かった。シュールストレミングの空になった缶詰が滑走路に転がっていた。白い液体は後部座席から尾翼に掛けて流れており、相棒は失神していた。
＜今日ハ晴天ニツキ更ニ進軍ニアタッテ敵トノ戦闘ノ際、敵ノ化学兵器ニ我々一時退却スルナリ、友軍ニ告グ以後ノ戦闘ニオイテ十分ニ注意スルベシ＞
　上官は今回の電文を見て私と相棒はその科学兵器にやられたということにされた。
　以後、数週間は私の愛機が寝ているドッグにはだれも立ち寄らなかったという。相棒はその数週間、茹でたジャガイモしか食べなかった。
　ある日、上官に呼び出されると相棒と私は部屋に入った。上官は少々、困り顔で大きな地図の前に立っていた。その側にはビールの瓶が何本か床に置かれていた。「これより大規模な戦闘がある。それには師団長も参加する大規模な物だ。敵の数は約３千、一方我が軍７千を持ってこれを撃砕する」それだけこのビールの意味が分かった。どうやらビールの雨は兵士の士気を上げるのにかなり有効的だったらしい。私と相棒はその任務を受けると久々に愛機に乗り込んだ。何も変わらない動作をし、滑走路から蒼い空に舞い上がった。しばらく進むと敵の飛行機の姿が見えた。今までとは少し形状が異なっているのに気付き少し集中をその飛行機に向けた。そして突如、聞き覚えの無い音が空に鳴り響いた。連続に小さな爆発が起きている音に近かった。私は一瞬で宙返りし、距離をとった。相棒も少しオドオドしており、事態を飲み込めていなかった。が愉快な空は健在だった。敵のパイロットは大笑いしながら私の隣に並んだ。そしてドヤ顔でその機銃を撃った。とうとう空に武器を持ち込む時代なのかと私が思っていた時だった。敵の機銃が暴発し、エンジンが火を噴いた。パイロットは慌てて、体勢を立て直し、近くの湖畔に不時着した。私と相棒はその姿に少々呆れ顔になりつつも、相棒は機体すぐそばにビールを落とした。私と相棒は大破した機体を後にし、戦地へと向かった。
＜今日ハ東ノ戦地ニテ師団長率イル軍隊ハ敵ヲ撃沈スルナリ、ソノ際、味方ノ空軍ガ目ノ前デ墜落スルナリ、二人ニ怪我ハ無イガ、二人カラノビールノプレゼントハ戦士ヲ多イニ歓喜サセタナリ、又墜落ノ原因ハ整備不良ト思ワレル＞